

図書報だより

題字 島根県教育委員会教育長

号数 第16号
発行日 昭和47年1月1日
編集行 島根県立図書館
編発 松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 ㈲高浜印刷所



提供 川本貢功氏

慶弔の返えしに本をどうぞ！

人間は生まれ、そして死ぬ。その間に織りなす喜びと悲しみが人生である。生まれて死ぬのは個人であるが、人間は一人では生活できない。それは元来、社会的人間である。だから他人の喜びや悲しみを自分のものとして頗ち合う。それが、お祝いや香典などの趣旨であろう。

ところでだ。人間の善意は多分に形式化してくる。何を贈り、何を返えしたらよいか…誰しもとまどう。ええままよ、社会福祉協議会へ寄付すれば、香典返えしの面倒から救われる…といった安易感で、悪しからず御了承を…との、葉書一本の挨拶となる。その金は、多分有意義に各種団体で使用されているであろうが、その使途まで一々せんさくはしない。他にも、有意義な「お返えし」方法はないものか…。そこで…

「慶弔の返えしに本をどうぞ」という私の提言となる。

県や市町村の図書館に、あるいは公民館や学校に、「何々氏の善意による寄贈」と刻印した本が並ぶとき、そして、その本が形を失うまで、沢山の人々によって読まれて「心のかて」となるとき、その善意はとこしえに生き続けて行くであろう。

県民の皆さん。本を贈り、本を読もう。考える人間をつくり、今一つの人生を見つけるため、本を贈り続けて行こう。

県立図書館長 速水保孝

廣州の旅



香港九竜駅から汽車で1時間あまり、国境駅羅湖に着く、30米ほどの小川にかかる鉄橋を渡ると、そこは中華人民共和国である。

11月というのに、南国らしくアカシヤの花が咲き乱れ、汗ばむ程の暑さである。ゆったりとした田園風景の中にある小さな田舎駅が中国の自由世界に開く唯一の窓口、深圳駅なのである。ここから広州まで汽車でおよそ4時間の旅程だ。時折、貨車に積み込まれた豚やアヒル達の悲鳴が物静かな駅舎にこだまする。物々しく武装した兵士達、小高い丘の上のコンクリートの監視哨が現実の重苦しさをすっしりと感じさせる。少なからぬ緊張とのどかな静けさが奇妙に交錯するなかでの中国への第一歩であった。

私の旅の目的は広東省広州市で開催される中国輸出商品交易会に参加し、島根県の対岸貿易の一環としての中国貿易の可能性を探ることにあった。しかし、なによりも、この得難い機会に感謝したのは、新聞の断片、推測などで漠然と想像せざるをえなかった新しい中国をこの目で確かめることができたことであった。私の見たものは、もはや、想像の中の中国でなく、現実の中国であった。

夕刻の広州駅前、自転車のラッシュである。灰色や雑色の人民服姿の人々が足早に行き交う。黄ぼい練瓦造りの家並にはネオンも看板もない。今朝見てきた香港の異様なけばけばしさが、ほんの目と鼻の間、同じ中国大陸の一部とは思えぬ程の地味な風景である。

人々の表情は柔い、そして素朴である。文化大革命後、中国人達の厳しい姿勢を予想していた私には意外な事実であった。街中に溢れているといわれていた毛澤東の肖像も壁新聞もほんの僅か、紅衛兵のかわりに見たものは珠江の河畔でぼんやりと憩う人々の群であった。やはり、どこの世界でもそうである様に、中国でも、極く普通の人々の大部分は政治にそれほど関心を払っていないのではないか……ふとそう思えたのであった。

革命後、中国の民衆の生活は飛躍的に発展したといわれている。交易会場に展示された生産物の豊富

松江青年会議所 山本 隆志

さには目を見張らせるものがあった。しかし、一般的に未だ貧しい。自転車、ラジオ、ミシンが庶民あこがれの生活利器であり、質素な木綿の人民服が普通である。老人も若者も、又交易会の幹部職員も全く同じ服装である。女性は化粧気がなく、毛澤東バッヂが唯一のアクセサリーだ。中国では勤儉貯蓄が美德とされているという。建国なればとはい、「自力更生」「為人民服务」のスローガンのもとに7億の民が意欲にもえ、自らの欲望を制し、たくましく働く姿を見るにつけ、すでに私達が見失って久しいある種の健全さを感じさせてるのである。この様な精神の高揚は一体どの様にして生み出されるのか……。

それにしても、私達が当然と思っている物への欲望、個性化への願望、美しいものへのあこがれは中国ではどこに失せたのであろうか、とにかく、ホテルのボーイ、列車の乗務員にいたるまで、若い男女が何の気持もなく粗衣をまとい、生々と職務にはげむ姿は現実のものであった。

滞在中、私は「紅旗用水路」という映画を見た。たがねと鉄鎌のみで巨大な岩山をくり抜き、何百キロ先の砂漠地帯に農業用水をひくという映画であった。その有様は、正に、巨大な獲物にとりつく蟻の大群を思わせた。すさまじいエネルギーである。このような精神と力の爆発はすでに大慶での工業開発、大寨での農業開発で現実のものとなっている。

確に、今の中国は未だ貧しい。しかし底知れぬ可能性を思わせる国である。短い滞在ではあったが、たくましい建国への意欲、一つの目標を目指す確信に満ちた姿勢が末端に至るまで感じられたのである。

旅は人をして思考的にさせるという。この隣国への旅ほど私にもの考えさせた旅はなかった。

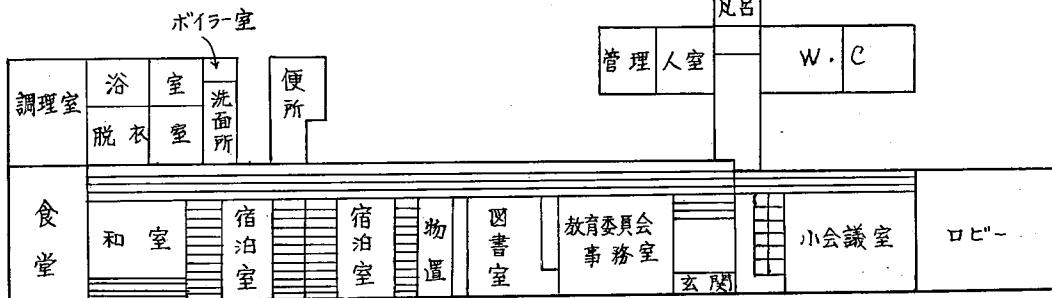
今の日本は物質の豊饒さに酔い痴れ、真に目指すべき目標を見失っているのではないか、公害、交通、戦争、電子レンジはあっても下水道すらない都市生活、溢れるばかりの物の中にあって、何か基本的なもの、欠如を感ずるのである。粗衣に甘んじ、建国にいそしむ隣国の人々の姿は、思想、経済体制は別としても、多くのことを教えてくれるのである。

モデル文庫紹介

昭和43年11月当町役場二階に設置して運営をはじめたが、その後昭和45年5月に頓原町社会教育センターの開設に伴ない同施設内に移転したものである。

このセンターは、高等学校再編成により廃校となつた旧飯南高校頓原分校校舎を改装して、内部に宿

社会教育センター 平面図



こうした施設の中で社会教育をすすめるためによりいれたのがモデル文庫である。現在図書室には県立図書館から借用している図書1,100冊をはじめ、町で購入した図書700冊、そしてもとの高校から引き継いだ図書1,500冊。町内の有志から受けた寄贈図書200冊など。あわせて3,500余冊の蔵書を配架している。

蔵書の整備計画は、児童用図書や一般教養書、文

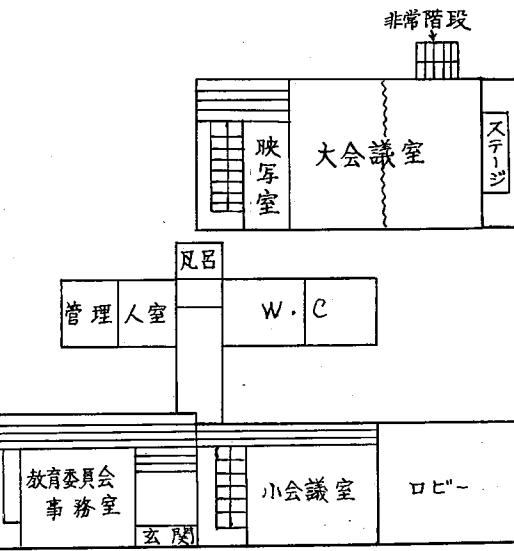
—郷土人文庫から—

免法記、田法記と岸崎左久次

「出雲国風土記抄」の岸崎左久次（諱は時照、左久次は俗名）は、それが「出雲国風土記」の最初の地誌考證だけに知る人もまた多い。しかし、左久次をそのような視点からみみるのは、些か物足らない思いがする。むしろ「風土記」の考證は彼の余技、副産物ではなかつたろうか。彼は本来、藩の地方の法（田制、土地制度、更には農村における民政一般をさす）に精通した能吏として松江藩初期における貢租制の祖型をつくつた有為の牧民官であった。松江藩はのち、八代將軍吉宗のとき、享保年間、定免法を鼓吹した結果、これを採用したが、寛延にいた

〈頓原町モデル文庫〉

泊室、ロビー、調理実習室、大会議室、小会議室そして図書室などを設け外部には、水泳プール、テニスコート、民俗資料館などを併設して名実ともに町の社会教育の中心となるよう配慮されている。



学などの実用書は県立図書館の図書を中心とし、町で購入するのは、辞典や参考書、古文書などの参考図書や基本図書を重点に整備する方針である。現在は、館内で閲覧と貸出しの業務を行なつてゐるが、利用者の主体は、小中学生である。今後の計画としては、読書会グループの育成や遠隔地への巡回文庫などを実施して、館外活動の推進を図る考えである。

って再び検見法をとつたのは、左久次がたてた辻見、立見の法によるすぐれた検見法のためであった。彼はその祖型を形作ったばかりでなく、永く藩の貢租制を確立したものと言つても過言ではあるまい。免法記は寛文2年（1662年25才）、田法記は天和2年（1682年45才）に著作されたもので承応元年（1652年15才）、春秋検地、立見御用見習を仰せ付けられて以来、国内を隈なく廻つて体得したものにもとづいて著作されたものである。免法記、田法記とも吉川弘文館の近世地方経済史料第六巻に所収されている。左久次の墓は松江市内、奥谷、萬寿寺にある。また遠齋は、東京都中野区若宮3-4-11岸崎泰氏がいる。当図書館には前記近世地方経済史料および、東京富士短期大学大森文庫所蔵のもの（須山本）の写真撮影によるものを蔵している。

図書館資料紹介

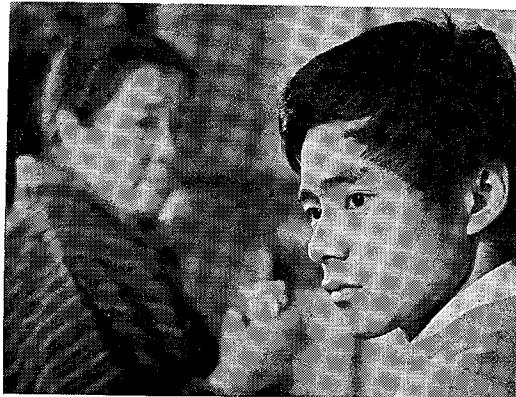
青年向

1. 映画フィルム

16ミリ社会教育映画

モノクロ 32分

ある若者の出発



貞夫は高校を出ると、大学に行くのはいやだと街工場に勤めるが、一般工具となれば中学出も高校出も同じで、給料も安い。今となって兄貴のように、背広にネクタイで、でかいビルの会社に勤めたいなどと思うのだった。そして工場にも行く気にならないで、きょうも休んでしまった。

そんなある日、兄の文夫が本社に出張で帰ってくる。貞夫は文夫の話を聞きながら、自分だけがいやな思いをしたり、つまらない毎日を送っていたのは間違いだったと考えるようになる、そして父親の自分の仕事に対する考え方、公園で出会った女の子チエの、地味ではあるが一つの目標に向かって、力一杯生きようとしている姿に触れ、なにかじっといられない気持になってくる。「そうだ、だれもおもしろいわけではない。でもやってみなきゃなにも起こりはしないのだ。」きょうこそはと貞夫はいつもの工場への道を歩いて行くのだった。以上がこの映画のあらましである。

現代の青年男女に対し「気まぐれ」で「無気力」で「何を考えているかわからない」という批判的な声が、親を含む一般のおとなたちの間でよく聞かれる。短期間のうちの転職、離職者が多い勤労青年男女をとりあげてみると、たしかに批判されても仕方ない面はある。これから社会に向かって大きくはまたこうとしている青年諸君にも、一度はおそれられるであろう。意欲の喪失、孤独感、無力感等をいかに

克服するかを考え、働くということは生活のためだけではなく、人間にとて必要不可欠なもので、その中に自分なりの生き方をさぐってゆかねばならないことを知っていただきたい。

2. 図書

「人形の家」 イプセン著 講談社 340円

著者 イプセンは1828年3月20日ノルウェーの小都市スキーンに生まれた。

代表作である本書は、劇化され、数多く上演されている。

従順なる妻から、自我をもった人間としてめざめていく女性「ノラ」をえがいた。 (大国)

「スウェーデン」 スウェーデン社会研究所編

芸林書房 780円

150年間も戦争をせず、戦争に巻きこまれもない国。社会保障が世界一に充実し、貧困層が見当たらない国。長寿の国。1人当たり国民所得がアメリカにつき世界第2位等理想的条件をそなえた国スウェーデンこそ日本の指針ではなかろうか。

自由と福祉の国スウェーデンの真の姿を紹介しています。 (木佐)

「英米文学で何を読むか」 小野寺健等著

研究社 700円

英米文学に造詣の深い寿岳文章他四氏によって、座談会形式で文学を紹介。小説、詩、劇、散文について、包括的な「リフト」を目指すものではなく、まずは、読者にこういうものから味わってはと、試食の勧めをする入門書です。 (来島)

「公害原論」全3巻 宇井 純著

亞紀書房 全巻 1,650円

平和な生活がなされるべきはずの一般市民におそいかかる恐るべき公害とは何であるか、そしてこの憎むべき公害を撲滅するにはどうすればよいか、若い情熱をこの問題にそそぎ込んで来た著者ははっきり言い切る。

被害者自身の加害者に対する展望なきねばり強い闘争があるのみと、そして現在の大学で教える学問が、公害対策にはあまりにも無力であると。

新しく成人になられる諸君は、この現代の難題を避けて通るわけには行かない。 (豊田)

次頁へ続く

「面接の心理と技術」 堀川直義著

法大出版局 B6判 309頁 580円

人間の日常生活は、面接に始まって面接に終ると
言われる。親と子の対話、来客の応接、さらに政治
折衝等に至るまで、相互的な面接でありその重要性
はますます増大している。

そして教師と学生、企業対企業、国と国における
コミュニケーションの円滑化、正確化のためにも面
接技術の向上が要望されている。

本書は、採用試験、身上相談等その理論と実際を
厳密な心理学実験によって科学的に分析し、個別的

な場面における面接のあり方を具体例をあげながら
考察している。

(引野) 「日本人の生きがい」 宮城音弥著

朝日新聞社 420円

流行の自己の価値観を押し出した生きがいとちが
い、心理学者である著者が体系的、総合的に考察した
著作。今日では、親や国家やマスコミがきめた生
きがいを、自分の生きがいとする時代は去った。必
要なことは生きがいの分析であって、これを通じて
個人は、その生きがいを自ら選択し決定すべきもの
ではなかろうか。

(藤井)

新着資料の紹介

I. 図書資料

○総 記

山陰文化シリーズ

日本叢書索引

読書の整理学

図書館学とその周辺

学問の周辺、統学問の周辺

○哲 学

日本朱子学と朝鮮

創造性の心理学

人間工学概論

殉教の人

弓と禪

○歴 史

郷土史研究講座

西洋の没落(1)、(2)

騎馬の歴史

朝鮮歳時記

(カラー) 京都の魅力(1)~(3)

○社会科学

統学校教育全書

日本経済史大系

国際金融論

マルクス資本論

○自然科学

社会人の数学

地図の利用法

微生物学 (上巻)

(写真集) トキ

サリドマイド

広瀬 敏

紀田順一郎

末川 博

阿部 吉雄

黒田 正典

佐藤 方彦

出町 信義

中西 政次

古島 敏雄等編

O・シェペングラー

横山 貞裕

姜 左彦

中村 直勝

水治 富雄

楫西 光速

池田 健

カール・マルクス

高野 一夫

西村 跡二

浅野 清

松田 一松

増山元三郎

○工 学

日本の安全衛生運動

中央労働災害防止協会

近世の建築

藤岡 通夫

朝日市民教室 日本と核時代

はじめてみるトランジスタの本

奥沢 清吉

○産 業

円切上げと日本農業

森 有義

忘れられた利用者

R・フェルメス

日本の古代米

佐藤 敏也

日本の経済と農業 上・下巻

東畑 精一

○芸 術

現代芸術の美学

竹内 敏雄

グラフィック・デザイン講座

帆足 実生

煎茶の世界

橋林 忠男

○語 学

世界言語概説 第1・2巻

市河 三喜

辞典の話

惣郷 正明

砂漠に埋もれた文学

中野美代子

○文 学

英米児童文学史

猪熊葉子等

近代日本文学評論史

長谷川 泉

俳人山頭火の生涯

大山 澄太

年鑑代表シナリオ集 1970年版

海の瞳

清岡 卓行

死の島 上・下巻

福永 武彦

(解註) 謡曲全集

野上豊一郎

東洋的回帰

花田 清輝

アラブの近代文学

川崎 寛雄

歴史と文学

マン、ハインリヒ

近代仏文学にあらわれた日本と中国

W・レオナード、シュワルツ

レファレンスコーナー

自衛隊の実情が知りたい

(答) 自衛隊の発足は先ず1950年8月警察予備隊として誕生し、1952年8月に保安隊と名を改め、1954年7月に現在の自衛隊となった。当初(1954年)15万200人だった隊員は1970年現在で23万4,000人となった。70年度の防衛予算是5,693億5,400万円で、一般会計予算に占める割合は7.16%となっている(時事年鑑1971年版)。また1972年~1976年にわたる第4次防衛力整備計画によると、実に総額5兆2,000億円が防衛庁案として提出されており(朝日年鑑1971年版)、防衛費の増大が問題になっている。軍事費用に関しての文献では、「島恭彦著 軍事費 岩波新書 第4章戦後日本の軍事費」が分りやすく書かれている。

自衛隊の機構は内閣総理大臣が最高責任者であり、その下に国務大臣である防衛庁長官、さらに陸上、海上、航空の各幕僚となり、シビリアン、コントロール(文官優位性)がたてまえとなって

いる。機構については「防衛年鑑刊行会編刊 防衛年鑑」が詳しい。

最近自衛官の教育について問題が生じているが、「自衛官の大学受験について(座談会)

ジュリスト 426号」

「小西誠著 反戦自衛官は告発する 中央公論
'70年8月号」

などが参考になる。

また日本国憲法と安保条約との関係について論じた資料は比較的多いが、次のものをあげておく。

「清水伸著 憲法と自衛隊 朝雲新聞社」

「毎日新聞社編刊 安保と自衛隊」

「 同 国民と自衛隊」

「自主防衛の現実(特集) 中央公論
'70年9月号」

「星野安三郎著 国民の抵抗権 世界
'70年5月号」

《司書のメモ》

「あなたに最も役立つ本は、あなたを最も考えさせる本である。」とパーカーは言っています。

さて最も考えさせる本をどうしてさがしたら良いのでしょうか。

現代は情報爆発時代とか情報過多の時代とか言われていますが、出版界の様子を出版年鑑(71年版)で調べて見ますと、年間(S. 45. 1~12月)新刊書だけで18,754点、重版が8,064点、計26,818点が出版されています。(いづれも雑誌等を除く)ところで1人年に何冊読むのでしょうか。数十冊が限度ではないかと思われます。して見れば読もうとする本はよほど慎重に選ばなければなりません。

そこで本を選ぶための資料を紹介して見ます。

出版社等のPR誌(一般向)

図書 岩波書店(月) A5 P20 10円

新刊展望 日本出版販売KK(月) B6

P40 30円

新刊ニュース 東京出版販売KK(月) B6

P50 30円

今橋ニュース 今橋クラブ(月) B6 P90 50円

風景 悠々会(月) A5 P60 40円

未来 未来社(月) A5 P60 20円

出版ニュース 出版ニュース社(旬) B5

P45 90円

新聞の新刊紹介

島根新聞 毎週水、土曜日

朝日新聞 毎週月曜日

毎日新聞 毎週水曜日

読売新聞 毎週月曜日

サンケイ新聞 毎週水曜日

その他専門紙として週刊読書人、日本読書新聞、図書新聞(週刊)があり、また週刊誌、雑誌にも紹介されています。

放送による紹介

BSS(ラジオ)アフタヌーンダイヤル(14.00~15.30)の毎水曜日に“今週の1冊”と題して読書案内を行なっています。担当は当館職員が毎回交替で紹介します。

読書のご相談には、近くの公共図書館(県市町村立)をご利用ください。上記の外いろいろ資料を取りそろえご相談に応じています。

司書 木佐由延

郷土の稀書

県庁引継文書と 池尻家文書

県立図書館は一昨年から島根県庁所蔵の郷土資料の引継ぎを受けてこの程ようやくその整理分類をおえたのであるが、これらの資料は旧県史編さんのとき広く県の内外に採訪してこれを臨写し、あるいは影写した謄・抄写本であった。さらには明治初年以来の行政生資料又旧藩時代の刊本類（和・漢・洋）であって、その数およそ1万2千冊をこえるものであった。就中、中・近世の写本類にはその写文字に生硬のものがったりして些かものたらぬ嫌いのものがある。原本はその当時、（明治末期～昭和初期）すでに原所蔵者の許に返戻したのであるが、その後、一・二代と当主もかわり、ことに社会状勢の移りかわりによって史観も大きく振り動いた。戦前の郷土史は地方史となって中央史を組み立てる重要な意義を持つようになった。そこで県立図書館も再び嘗ての借覧原本や、新史観にもとづく資料を発掘蒐集しようとして最初に手掛けたものが今回の池尻家文書であった。昨年来幾度か交渉を重ねて曲折を経ながら今回ようやく図書館の所有となった池尻家文書は点数にして概ね五百点をこえる比較的纏った地方文書である。
ジカタ

その内容は、

1. 田畠竿入帳（安永10～文化10）
1. 立見野取帳（安永9～文化10）
1. 田畠懸年貢取立算用帳（天明5～文化10）
1. 宗門改帳（寛政4～文政8 56冊）
1. 御用留（安永4～安政2 20冊）
1. 御巡見様一途（天明7～文政6）
1. 殿様御国廻り一途（寛政4～天保14 17冊）
1. 日御崎・杵築大社御社參関係（明治9～嘉永7 63冊）

……等々。

主なるものは右のようなもので、研究者にとっては垂涎のものと言えよう。しかし、この種の資料は現在なお、県下に佚存する諸家文書を蒐集することによっていよいよその資料価値をますもので、そこから研究者各自が何ものかを引き出して組み立て、帰納すべきものである。この池尻家文書の入手を端緒として根気強く資料の採訪蒐集をつづけて行きたいものと思う。

（図書館嘱託 桜木 保）



9月1日から

- 9月1日 出雲風土記展（9月中展示）
- 3日 安来市飯生地区老人会 150名見学
- 4日 大東町佐世婦人会見学々習
古文書を読む会（入門講座）
- 10日 東出雲町意東小学校4年生 PTA65名見学
- 11日 文化映画を見る会、ステレオコンサート
- 13日 B M（八束コース）
- 14日 図書館婦人教室〔集会室〕
B M（平田、大社コース）
- 16日 映写機操作認定講習会（出雲職安）
B M（島根半島コース）
- 17日 郷土文学に親しむ会〔集会室〕
B M（伯太コース）
- 18日 古文書を読む会
安来小学校 160名見学
- 20日 B M（横田、仁多コース3泊4日）
- 22日 平田市鰐淵小学校猪目分校生17名見学
- 25日 大東町久野若妻学級生20名見学々習
- 28日 県図書館協会臨時会〔集会室〕
大東町春殖小学校5、6年60名見学
B M（邑智コース3泊4日）
- 29日 東出雲町上意東小学校35名見学
- 30日 平田市桧山小学校60名見学
(9月中閲覧者総数 12,197人)
- 10月1日 全国観光パンフレット展（10月中展示）
秋季ばく書（11日まで休館）
香川県婦人国内研修員17名見学映画学習
- 4日 B M（那賀コース 2泊3日）
- 7日 中国地区公共図書館職員研究集会
(集会室7日、8日開催)
- 11日 B M（美鹿コース 4泊5日）
- 13日 江津市波積小学校60名見学
- 15日 図書館協議会（第2回）
- 16日 古文書を読む会
- 18日 掛合町入間小学校60名、木次町温泉小学校60名見学
- 23日 文化映画を見る会 ステレオコンサート
古文書を読む会（入門講座）
- 25日 映写機操作認定講習会（出雲工校）
- 27日 移動図書館特別巡回（27日大田市、浜田市、28日益田市、津和野町、29日柿木村）
- 29日 松江市乃木小学校家庭教育学級37名見学
学習
(10月中閲覧者総数 7,414人)



松江市外中原町 古川久江

「ツワブキの咲く町」から津和野の地名が生まれたとか、一度行ってみたいという念願が叶って、津和野駅に降り立ったのは、秋も深の11月10日の夕方でした。駅前で真先に目にとび込んだ山、頂上にうっすらと雲がかかり、姿の美しさに思わずシャッターを切りました。これが県立自然公園に指定されている青野山だったので。古い家の残っている町を暫く歩くと、藩校養老館跡があり、現在は図書館と郷土民芸館になっています。民芸館には昔懐しい民具が陳列してありましたが、現代の子供達には利用のわからないものが多いだろうと思いました。この建物の前の小川に、津和野川の水を引き入れて、きれいな水が流れ、色とりどりの鯉が放飼してあります。町の人達も各自家の前で鯉を可愛がっているとか、大橋の下にも逃げもせぬ住みついでいました。

その夜は、国民宿舎青野山荘で、地元の読書会の方々と、交歓会を開き、楽しそうな読書会の様子を

聞かせてもらいました。翌朝、雲海の棚引く山の上に、古城の石垣が朝日に輝いているのが余りにも身近に見えびっくりしました。町の文化財係長の森澄先生に案内していただき、森鷗外、西周の旧居を巡って、三本松城跡に登りました。サクサクと落葉をふみ、足元に碎けている瓦が昔の城のものと聞くと、建造物は残っていないなくても石垣の堅固さ雄大さだけで昔を偲ぶ何かがありました。頂上に立つと町並が一望され中国山脈の峰々が連なって、実によい眺めでした。大鼓谷稻成神社、永明寺、乙女峠のマリヤ聖堂、と好天に恵まれ紅葉も見頃、山茶花やツワブキの花も所々に咲き、津和野の一番美しい季節に訪れる事が出来てさわやかな一日でした。山間の小じんまりした地形が、どこへ行っても優雅な姿の青野山に相対し、観光地が一つの線で結ばれているのが、この町の印象を強くするのでしょうか。

古典文学を読む会 県立図書館ではじまる！

かねて市民の皆さんから要望がありました“古典文学を読む会”が、去る11月から（毎月第2、第4土曜14時から）はじめました。

講師は松江市の出身で現広島女学院大学教授の宍道達先生です。

この会は、“源氏物語”を中心に勉強して参ります。最近、口語訳源氏が多く出版されていますが、それ

は話の筋を追うのに便利であっても、源氏のもつ精神や、心理の微妙なはたらき、王朝時代の精神生活を理解し、味わうにはやはり原文を読む必要があります。

このたび発足した“古典文学を読む会”において、文章そのものの美、王朝精神と文章との接点において女性の生き方、今も昔も変わりのない人間の姿を心ゆくまで味わっていただきたいと思います。

県立図書館行事予定

1月～3月

1	上 中 下	図書館協議会（第3回）		レリーフ 工芸画展
2	上 中 下	図書製本修理技術講習会 自動車文庫巡回（第5回）	大田市 関係市町村	入選読書感想文 原稿展
3	上 中 下	県図書館協議会（第4回）	当館	県内PTA 広報資料展